

体育方法学およびコーチング学に関連する名称は統一できるのか？

青山 清英¹⁾

「体育方法学およびコーチング学に関連する名称は統一できるのか？」。

この課題を検討するにあたって、まず、はじめに「体育方法学」という学問領域が歴史的にどのように展開してきたかについて確認し、その後、「コーチング学」について検討したい。さらに、体育方法学、コーチング学の現状をシラバス等の科目名から検討することによって、現状の我々の認識を確認し、これらをふまえ最後に今後の展望を示したい。

1. 体育方法学の展開

体育学およびスポーツ科学における「指導に関する理論」の発展過程をたどると、体育では何を教えるのかという「体育教授学」、運動材の具体的な指導方法を提示する「体育方法学」、動きの質的評価と形成の問題を扱う「体育運動学」の三つの研究領域が体育の理論の中核的研究領域として独立して扱われるようになったという（フェッツ、1979）。そして、この体育方法学は「体育の理論」の分化的発展過程から見た場合、体育の科学化の要請から体育科学を経てスポーツ科学という名称が用いられるようになるなかで、スポーツ方法学と名称が変更されていく。さらに、その後それを継承した形でトレーニング学が登場した。そのトレーニング学は当初、実践的経験から帰納的に一般理論を構築しようとしたが、スポーツ科学をめぐる議論のなかでトレーニング学を科学化すべきであるという要求の高まりに応えるかたちで「トレーニング科学」という名称が用いられたという背景がある（朝岡、2011）。スポーツ方法学は、この一連の過程のなかでトレーニング科学におけるトレーニング周期論、計画論の一部として発展的に内包されている（朝岡、2011）。この一連の経過を見てみると、トレーニング科学が我が国において理解されているような、トレーニングという活動を対象にした自然科学的学際領域とは本来的には異なるということが分かる。すなわち、トレーニング科学がスポーツ方法学を内包しているということは、単

にトレーニング活動を対象にした自然科学の集合体としての「トレーニングに関する理論」領域というよりも、実践知、経験知を内包した広義の意味内容をもつ「練習と指導に関する理論」領域、つまり「コーチングに関する理論」領域であるということが出来る。では、次にこの「コーチングに関する理論」のあり方について見ていきたい。

2. コーチングとは何か

コーチという表現はヨーロッパ中世の馬車に語源をもち、19世紀半ばにその馬車に乗る家庭教師その人に転用され、さらに大学のチューター（個別指導教員）やスポーツ指導者に用いられるようになった。馬車から指導者に転用された「コーチ」という表現は、さらに動詞化されて（to train）個別に指導すること、すなわち「コーチング」として名詞化されていく。ここでひとつ注意しておきたいことは、このコーチングに類似した用語の「トレーニング」は、「一斉に反復練習すること」を意味しているので語源的には区別される。しかし、＜コーチする＞は＜訓練する＞や＜指導する＞という意味にも用いられるので、類義語として用いられる場合がある。しかし、今日的にはスポーツ科学辞典（バイヤー編、1993）においてコーチングは、「コーチが学習者に助言したり、管理を行う活動の全体」と定義され、これに対してトレーニングは、「達成力を具体的な目標に向かって計画的に発達させることを目指した、複合的な行為の過程」と定義されている。

したがって、コーチング＝トレーニングあるいはコーチング学＝トレーニング学（トレーニング科学）という関係は成り立たないことが理解されるであろう。それに加えて、我が国で用いられている「トレーニング学」は、「体力トレーニングに関する自然科学的研究」という印象が強い（朝岡、2011）ため、どうしてもコーチングという語が語源的に持っている人間的教育的要素が反映されにくくなる。このように見てい

1) 日本大学

くと、「コーチング」には「人間関係」という要素が色濃く反映されると共に、体育方法学、スポーツ方法学が本来的に持っている経験的実践理論という特徴が内包されることが分かる。

また、我々のスポーツに関わる世界とは異なる領域では「コーチング」はどのように理解されているのだろうか。現在、「コーチング」という語は、ビジネス・コーチング、心理コーチング、臨床コーチング、介護コーチング等、様々な領域で用いられている。これらの領域では「コーチング」という語は概ね次のような定義で用いられている。「コーチングとは、対話を重ねることを通して、クライアントが目標達成に必要なスキルや知識、考え方を備え、行動することを支援するプロセスである」(コーチ・エイ, 2009, p.12)。そして、コーチの大きな役割は、「クライアントが自らの力で精神状態をコントロールしながら、目標達成に向けて解決する必要がある課題を『自ら解決』するのを支援することにある」という(コーチ・エイ, 2009, p.13)。

このように見てみると、「コーチング」という語には、人間的・教育的・経験的・実践的意味が備わっていることが分かる。このことは、我々の「スポーツのコーチング」を対象とする「コーチング学」を考える際にも本質的価値として共有するものである。

3. シラバスから見た「体育方法」と「コーチング」

次に、「体育方法」と「コーチング」という語をシラバス等に見られる科目名の観点から見ていきたい。

まず、講義科目では、「体育方法学」「運動方法学」「コーチ学」「コーチング学」「コーチング論」等の名称が用いられていた。その内容は、競技スポーツ、学校や社会での教育現場、臨床リハビリテーション等を対象とした「指導と練習(学習)に関する内容」であることが確認できた。このようなことから、通常、理解されているような「体育方法」及び「コーチング」は競技スポーツだけが取り上げられているわけではないということを強調しておきたい。

次に実技科目、ここでいう実技科目は体育ないしはスポーツ科学の専門課程における実技科目であるが、陸上競技を例にとると、「運動方法(陸上競技)」「運動方法論(陸上競技)」「体育方法(陸上競技)」「体育方法論(陸上競技)」「スポーツ方法(陸上競技)」「スポーツ方法論(陸上競技)」「陸上競技方法論」「陸上競技コーチング論」といった用いられ方をしていた。

そして、その内容を概観すると、いずれも体育・スポーツ科学の専門課程が教員養成を念頭においていることもあるが、「体育方法」「コーチング」いずれの場合においても、学校体育に関わる実技実習として位置づけられている。したがって、「体育方法」及び「コーチング」いずれの用法も講義科目と実技科目共に教育的意味内容を包含した用いられ方をしているといえる。前述したように、「コーチング」という用語には、競技スポーツのみを対象としている「印象」があるが実際にはそうではないということを変更して強調しておきたい。

また、「体育方法学」という概念を純粋に研究対象という観点から見れば、その対象は教育活動の一部と見なされる社会体育と学校体育であるので、体育方法学は体育の指導に関する理論と見なされる。しかし、現実的には教育作用を表す「体育」と学校における教科としての「体育」を共に含む「体育」という概念が、その後の歴史的発展のなかで次第に、社会体育をも内包して、広くスポーツと同義に使用されることになる(日本体育学会監修, 2006)。当然、この「スポーツ」のなかには「競技スポーツ」も含まれることになる。実際に、体育方法専門領域における発表の内容などを見ても、いわゆる「体育方法学」というよりも「スポーツ方法学」あるいは「コーチング学」と位置づけられる内容が主流となっている。

さらに、体育方法専門領域及びコーチング学会としては、大学の一般教養教育における実技実習や講義の研究対象としての重要性を強調しておきたい。これらの授業のシラバスにおいては、「体育実技」「スポーツ」「運動実習」「スポーツ実習」といった表記がほとんどであり、「体育方法」や「コーチング」といった語は用いられていない。しかし、これらの教育活動においては「体育方法学」や「コーチング学」という語の持つ学問的意味内容が基底となっていることを忘れてはいけない。したがって、我々はこの名称問題を専門科目における学問的問題と矮小化してはならないだろう。

4. 現状と今後の課題

本稿で検討してきた観点とその他の名称問題を取り巻く現状をまとめると次のようになるであろう。

- ① 「体育方法」と「コーチング」という用語が併用されている。
- ② 「体育方法」「体育方法論」という用語は、「指導方法」という意味で主に用いられている。

- ③「体育方法」という用語は、教育的印象を強く持たせる用いられ方である。
- ④「コーチング」という用語は、競技スポーツの理論としてだけでなく教育的理論としても用いられている。
- ⑤体育・スポーツ科学以外の研究領域においては、「コーチング」という用語は人間的教育的な意味を極めて強く含んで用いられる。
- ⑥日本体育学会の国際誌である「International Journal of Sports and Health Science」では「体育方法」に相当する投稿ジャンルを「Coaching and Training」としている。
- ⑦「体育方法学」「コーチング学」には他の領域のような独自の研究方法論は見当たらない。それは、この領域の独自性は、研究方法論の独自性ではなく、研究課題の独自性にあるからである。したがって、研究方法論の観点からこの領域を見ると、まさに「何でもあり」の状況にある。つまり、「バイオメカニクス専門領域」の論文と「体育方法学」「コーチング学」における「バイオメカニクス的研究手法」を用いた論文のあいだにどのような差異があるのかが全く分からない。
- さらに付け加えれば、体育方法専門領域を母体として誕生した「日本スポーツ方法学会」は2009年に名称変更を行っている。その趣旨は当学会のホームページにも掲載された「学会名改称に関する趣意書」に見られるように、以下の4つの理由から成る。
- ①「スポーツ方法学」の社会的認知度の低さ。
- ②「コーチング」という用語が他分野に広がる現状を受け、「スポーツのコーチング」こそが「コーチング」の本流であるという主張。
- ③スポーツ方法学会が「体育方法専門分科会」を母体として発足した「指導に関する理論領域」とであるという学問的ルーツ。
- ④スポーツ方法学という用語の国内外における学問的意味内容の共通性の成立に関する問題。
- これらの点を踏まえると、「指導と練習（学習）に

関する理論」領域における「体育方法学」から「コーチング学」への名称変更の意義は、これまで「体育方法」という用語の持っていた「指導と練習（学習）に関する経験的実践的理論領域」であるという学問的特徴を発展的積極的に継承しながら、それとともに前述したような「何でもあり」の現状を打開するようなオリジナリティのある学問領域の体系化を目指すための出発点とすることにある。換言すれば、名称変更を新たな理論領域構築のためのエネルギーを生み出す出発点とすることである。前にも述べたように、体育方法学、コーチング学においては、独自の研究方法論を生み出すことは不可能である。なぜならば、既存の科学方法論を用いた瞬間、当該の母体科学をもつ他の体育・スポーツ科学領域との差異を見つけることはほとんど不可能だからである。したがって、体育方法学・コーチング学の独自性は、「どのような問題を解決するのか」という研究課題の独自性にあるといえるであろう。つまり、体育・スポーツ実践において発生した運動問題をどのように考えたら解決できたのか、或いは失敗したのかといったプロセスを説得的に記述していくことが重要となるであろう。これを実現することによって、ヨーロッパにおける「トレーニング科学」とは異なる経験的実践的内容を包含した理論領域としての「コーチング学」を国際的に問いかけていくことが可能となるだろう。

文 献

- 青山清英（2011）「実践の学」としての陸上競技コーチング学の今日的課題とテーゼ，陸上競技学会誌，9：15-19.
- 朝岡正雄（2011）ドイツ語圏における発展過程から見たコーチング学の今日的課題，体育学研究，56：1-18.
- バイヤー編：朝岡正雄監訳（1993）日独仏対照 スポーツ科学事典，大修館書店：東京，p.177.
- フェッツ：金子明友・朝岡正雄訳（1979）体育運動学，大修館書店：東京.
- コーチ・エイ（2009）コーチングの基本，日本実業出版社：東京.
- 日本体育学会監修（2006）最新スポーツ科学事典，平凡社：東京，p.612.

